

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	師田 史子
論文題目	フィリピンにおける賭博の民族誌的研究 —不確実な事象への没頭を通じた現実性の構築—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、フィリピン社会における賭博実践に焦点をあて、「賭ける」ことの意味を考察する。これまでの賭博に関する学術的な論考は、その多くが、賭博が社会悪であるというアприオリな断定に終始する傾向がみられた。本論文ではそれに代えて、偶然性やリスク、予測不可能性それ自体を娯楽の対象とする賭博の実践を、人々が不確実性に対処するための技法という視点からとらえ直すことを試みる。</p> <p>第一章では、フィリピンにおける賭博の政治的・社会的位置づけの変遷を素描する。植民地期から独立後の現代にいたるまで、フィリピンでは賭博の管理が大きな政治的イシューとなってきた。賭博は人々を怠惰と浪費に導く社会悪であるとの前提から、歴代公権力は賭博の取り締まりを試み、その根絶が不可能な場合は、公営化や部分的合法化などの手段で国家機構への取り込みをはかってきた。このこと自体は世界で幅広く認められる事実であるが、国家権力の担い手から末端の賭博参加者に至るまで、賭博が社会のあらゆる層に深く埋め込まれていることがフィリピンの顕著な特徴として見いだされる。</p> <p>第二章では、賭博をめぐる道徳観念について論じる。賭博を支える人々の価値づけを見ることで明らかになるのは、国家の定める賭博の合法性／違法性と、人々の抱く「逸脱した賭博」「悪しき賭博」といったイメージが一定のズレを含んでいるという事実である。フィリピンにおいても、賭博が無条件に人々の支持を得ているわけではなく、賭博耽溺者への批判は常に存在する。しかしそこでの善悪の基準というのは、法的な合法性ではなく、道義的妥当性の有無 (licit/ illicit) にしたがって価値づけられているのがその特徴である。</p> <p>第三章・第四章では、闘鶏の事例を取り上げる。第三章では、闘鶏産業を概観しながら、それが生業として成立しているメカニズムに着目する。そこからは、闘鶏に没頭する人々が賭博を生業として維持し続けることができている背後には、家族・友人など闘鶏に参加しない人々による日常的な不確実性への対処と、闘鶏家同士の緩く広い繋がりが働いていることが明らかになる。</p> <p>第四章では、闘鶏の現場において、不確実性がどのように扱われているのかを検討する。闘鶏においては、鶏の状態が勝敗を左右することから、そこに参加する人々は鶏に関する膨大な知識を蓄積しながら、最善と思われる賭けを行う。にもかかわらず、鶏の行動は完全な予測が困難であるため、不確実性の要素は常に残る。鶏に関する知識が膨大であるだけに、負けの要因として想定されるものもまた非常に多くな</p>			

り、このことが因果関係の推測自体を不成立にしてしまう。その局面で持ち出されるのが、不運という説明原理である。

第五章と第六章では、数字くじの事例を取り上げる。二桁の数字を当てるという数字くじは、当人の技量と無関係に当選確率が百分の一に固定されている、という意味で、「面白さ」を欠くとされるが、ならばなぜ人々は数字くじに熱中するのか。第五章での考察を通じ、当事者レベルでの語りに着目することで明らかになるのは、当選番号をさがすなかで、自分の暮らしの周囲にその予兆を見だしそれを意味づけていく、という「遊び変え」が、数字くじを人々にとって有意義なものにしているという事実である。

しかし、人々のそうした働きかけが、百分の一に固定された当選確率を高めるわけではない。ならば人々は確率論の誤謬に陥っているのだろうか。それを考察するのが第六章である。そこでは、賭けの当事者たちの行動が実際の当選確率を理解していないのではなく、現実の賭けの現場においては、自分が選んだ数字が当たるか外れるかの二者択一として争点が構成されるため、百分の一の当選確率が二分の一に収斂していくことが明らかになる。

結論では、闘鶏と数字くじから浮かび上がってくる、不確実性への賭博者的な身構えについて考える。異なる事例から共通して見いだされるのは、あえて不確実性に自らを投企する人々の姿である。人々はよりよい結果を得るためにさまざまな変数を考量し、あらゆる手段を尽くした果てに、最後の瞬間にはあえて不確実性に身を委ねる判断を行う。この発見は、不確実性の根絶が不可能な現実のなかで、あえて不確実性自体を楽しみながら、自分の生活を有意味なものに作り替えていく人々の技法である。